屋久島を訪れる観光客の環境保全意識

深見 聡*･仁木 可奈子**

The Environmental Conservation Consciousness of Visitors to Yakushima, Kagoshima Prefecture, Japan

Satoshi FUKAMI,Kanako NIKI

Abstract

Ecotourism is lately subject of interest within the field of sustainable tourism. Especially travel to nature world heritage sites are getting more popular within this field. The object of study is Yakushima, the most developed place for ecotourism in Japan. The questionnaire based survey was undertaken in order to know the characteristics and environmental behavior of visitors and the features of environmental conservation consciousness of the visitors were examined.

As a result 3 main point were clarified:

1) The interest of visitors to nature world heritage sites is high and most of them have positive image of nature heritage sites, the visitors were aware about world heritage conservation system.
2) The questions in the survey were related to usage of toilets in the territory of national park. The visitors think that nature of Yakushima should be cared, and knows about impact to environment of Yakushima, but questionnaire results showed negative responses for the different solutions of environmental impact issues.
3) The visitors are attracted by the nature of Yakushima as a matter of course. But if the condition of environment would change to worse in future, there is tendency that visitors who would choose Yakushima as travel spot will decrease.

Yakushima got popular after it is declared as nature world heritage site, the people are attracted by it is wonderful nature. Of course, many visitors causing environmental issues but on the other side visitors are getting information about the environmental issues after their visitation to site.

This paper provides environmental behavior of mostly younger generation visitors, so there is a need for further study on environmental consciousness of conservation activities which includes wider age range.

Key Words: Yakushima, Nature World Heritage, Environmental Impact Issues, World Heritage Conservation System

1. はじめに

さまざまな地域で、エコツーリズムを掲げた持続可能な観光のあり方が模索されている。とりわけ、世界遺産をめぐるツアーは、その中心的な位置づけがなされているように思われる。世界遺産そのものは、観光振興を目的とした制度ではないが、現実には世界遺産の登録をめぐって、日本国内では観光を中心とした地域振興の起爆剤として期待されており、登録に向けた熾烈な争いが繰り広げられている。しかし、世界遺産を利用した観光産業は、後世に自然環境を継承するという上では格好の場ではあるが、多くの人々に知られることによる自然環境の負荷も懸念されるという矛盾も起きている（鈴木, 2010)。したがって、世界遺産登録後の観光客の増加による、多くの人々の自然環境保護の認識の向上や推進、地域経済の活性化といったプラスの側面とともに、一方で観光客の増加による自然環境への負荷といったマイナスの側面にも注目する必要がある。今後、自然を「知ること」と「適正容量への議論」の相互啓発の視点はエコツーリズムを考える際に避けてはとおれない (深見ほか, 2003；深見, 2011)。

*長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科
**豪州マードック大学附属語学学校 学生

（受理年月日　2012年5月1日）

このように、世界自然遺産登録によるメリット、デメリットはそれぞれあるが、先述の２つのバランスがとれれば環境保全を柱としつつ、観光を中心とした地域振興へも持続的な発展をもたらすのではないかと考えられる。

そこで本稿は、エコツーリズムの“先進地”とされる世界自然遺産・屋久島を対象とし、ここを訪れる観光客の環境保全意識の現状を把握し、その特徴について考察を加えることを目的とする。

2. アンケートの実施概要

アンケートの採取は、全15問からなる調査票（調査用紙およびその回答方法については資料を参照）を用いて、2011年9月8日から13日にかけておこなった。

実施地点は、鹿児島港と屋久島を結ぶ高速船フェリーが発着する宮之浦港ターミナルとし、ターミナルから鹿児島港に向けて出発便を待つ観光客を対象とした。調査対象者の選出にあたっては、筆者から「観光客ですか？」とたずね、「観光客」と回答した方（観光客と自身で認識されている方）にアンケート調査票を配り自記式の方法とした。その結果、158 部を回収した。なお、その結果は、若年層・中年層・シニア層と年代ごとに示し、それぞれの差異をみていくこととする。

3. アンケート調査の結果

3.1. 回答者の属性

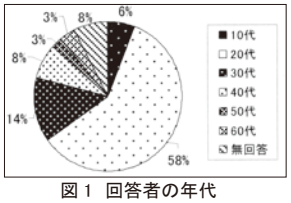


図１ 回答者の年代

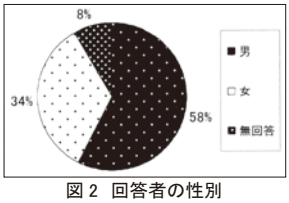


図２ 回答者の性別

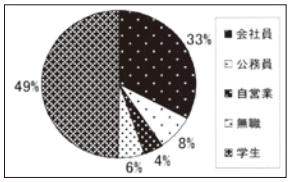


図３ 回答者の職業

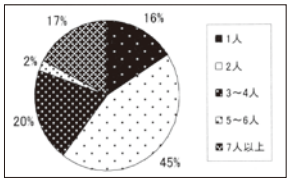


図４ 回答者の同行者数

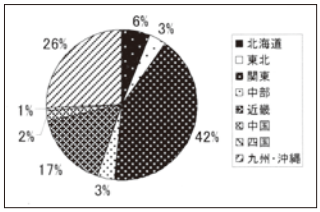


図５ 回答者の出発地

本章では、アンケート調査の集計結果について報告する。まず、ここでは回答者となった観光客の属性について述べる。

年代別では、10 代から 30 代（若年層）が最も多く占めており、40 代から 50 代（中年層）がそれに続き、60 代以上（シニア層）は極端に少なくなった（図１）。性別は、男性 58%、女性 34% となった（図２）。職業別では、若年層の回答者が多くなったことを反映して学生が約半数の 49% を占め、その次に会社員の割合（33%）が高くなった（図３）。同行者数別では、1人と2人を合わせて61%であった（図4）。出発地別では、関東が42%と地理的距離の近い九州・沖縄（26%）よりも多くなっており、また、北海道や東北を含む国内各地から観光客が訪れていることが分かる。

3.2. 屋久島に対する意識

3.2.1. 世界自然遺産登録への意識

①世界遺産制度の目的

世界遺産制度のもっとも基本的な事項について質問した。図６は、資料１の質問５「世界遺産制度は、自然や文化の保護を目的としたもので、観光振興を目的には掲げてはいません。このことを知っていましたか。」に対する回答である。

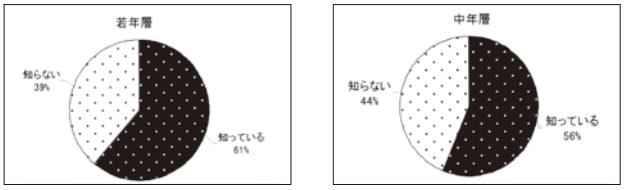


図６ 質問５に対する回答

これに対して、若年層、中年層の半数以上が「知っている」と答えた。シニア層に至っては、全員が「知っている」と答えた。これは、観光客に世界遺産が本来持つ保護の役割が一定程度認識されていることを示している。

②世界自然遺産と観光客増加への意識

観光客の世界自然遺産に対する意識についての調査結果である。図７は、資料１の質問６「いまあなたが訪れている屋久島は、「世界自然遺産」に登録されています。そのことは、今後、屋久島の旅行客が増えるのに役立つと思いますか。」に対する回答である。この質問に対して、3 世代すべて「かなり

そう思う」「ある程度そう思う」の項目が 90% を超えた。中年層とシニア層に至っては、否定的な意見がまったく出されなかった。

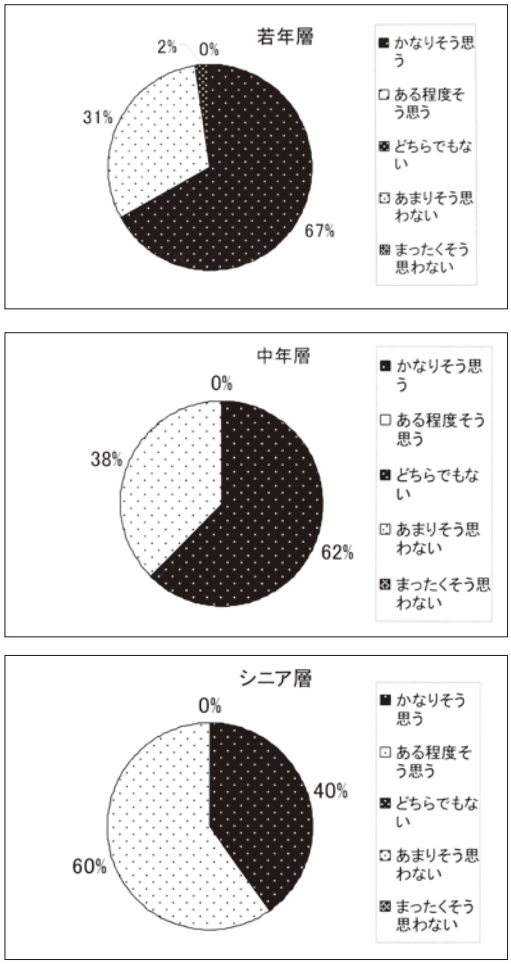


図 7 質問 6 に対する回答

また、図 8 は、資料 1 の質問 7「屋久島が「世界自然遺産」に登録されたことは、地域にとってプラスになったと思いますか。」に対する回答である。この質問に対して、若年層と中年層は、「かなりそう思う」「ある程度そう思う」を合わせてそれぞれ 65%、81% となり、シニア層は、100% であった。若年層だけは、「あまりそう思わない」の回答もみられた。

この 2 つの質問から、世代に関係なくほとんどの人が世界自然遺産の登録は観光客増加につながり、地域にとってプラスになるという意識が高いことを示している。

3.2.2 入山規制への意識

①入山規制実施への意識

観光客の入山規制に対する意識についての調査結果である。図 9 は、資料 1 の質問 10「登山客が増

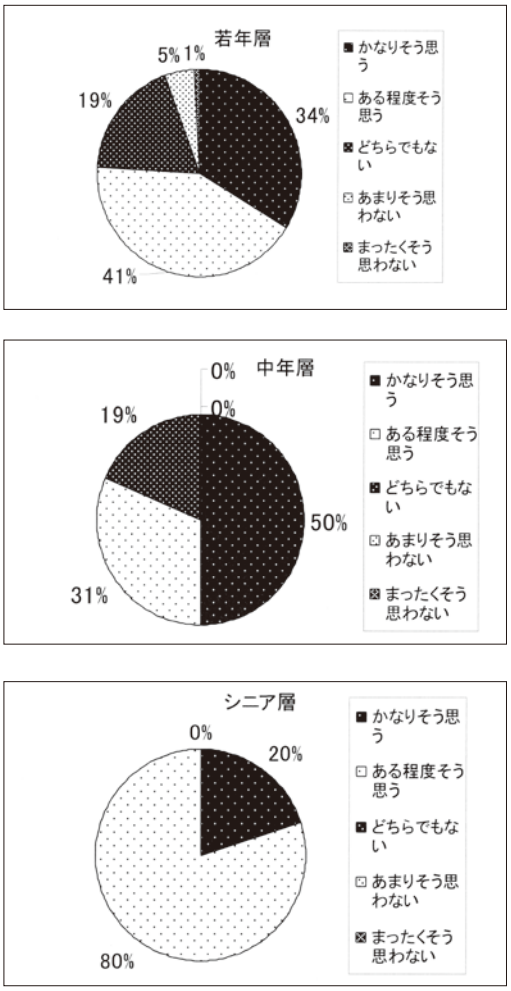


図 8 質問 7 に対する回答

えることで、自然環境への負荷が指摘されつつあります。それに対して、入山規制を設けるといった議論がなされている地域もあります。あなたは、入山規制がなされるべきだと思いますか。」に対する回答である。

この質問に対して、「かなりそう思う」、「ある程度そう思う」が若年層 78%、中年層 87%、シニア層 80% となった。若年層のみ、「まったくそう思わない」や「あまりそう思わない」などの否定的な意見もわずかながらみられた。

②立ち入り制限条例案否決への意識

図 10 は、質問 11「屋久島町役場は、自然環境への負荷を考慮した条例案（例えば、縄文杉への立ち入りを 1 日 400 人程度に制限し、1 人 400 円の手数料を支払うといった内容）を、2011 年 6 月に町議会に提出しましたが、議会は全会一致で立ち入り制限を設けることを否決しました。あなたは、このことについて納得できますか。」に対する回答である。

この質問に対し、3 つの世代とも「かなり納得できる」、「ある程度納得できる」を合わせると半数を超える回答割合となった。また、前の質問よりも、入山規制を肯定的にとらえる回答者数は減り、「あまり納得できない」と「まったく納得できない」の否定的な意見は若年層 21%、中年層 25%、シニア層 40% の割合となった。

この 2 つの質問からは、入山規制が必要であるという総論的な賛同は得られる一方で、具体的に 1 日 400 人の制限や手数料などの条件が提示されることには否定的な意識を抱く割合が高くなるという傾向が読み取れる。

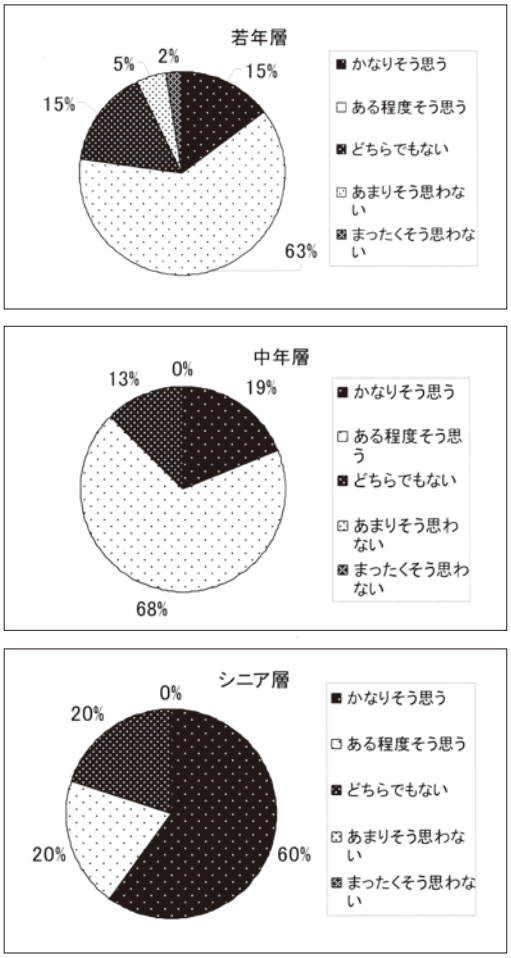
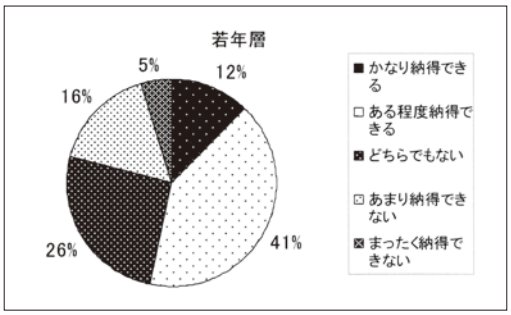
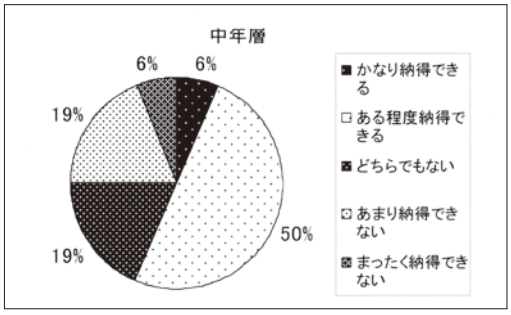


図 9 質問 10 に対する回答





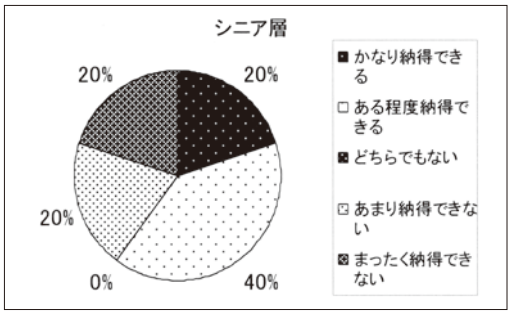
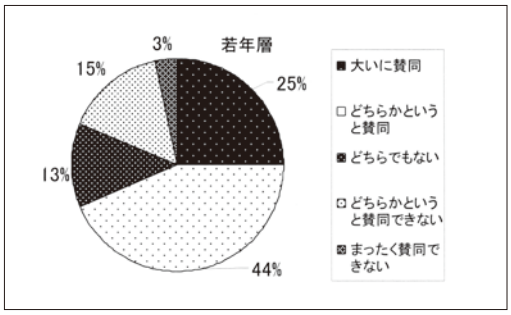


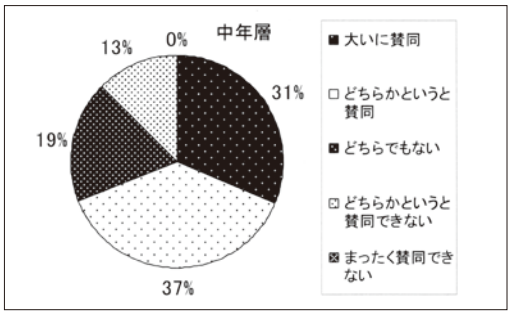
図 10 質問 11 に対する回答

3.2.3. 山岳部のし尿処理問題への意識

図 11 は、質問 12「屋久島の登山時におけるトイレの利用についてお聞きします。(1) あなたが利用したトイレが、有料（高くても 200 円）であったとします。このことについて、あなたはどう思いますか。」に対する回答である。

この質問に対して、「かなり納得できる」、「ある程度納得できる」は若年層 69%、中年層 68%、シニア層 80% となった。これはトイレの有料化に肯定的な意識が大勢を占めることを示している。





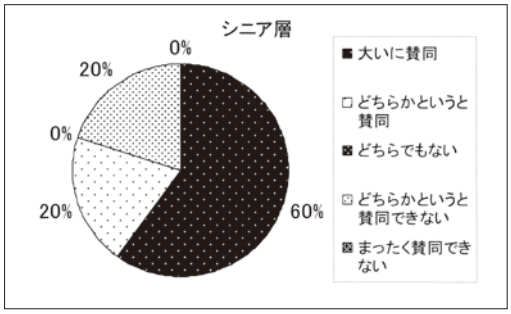


図 11　質問 12（1）に対する回答

図 12 は、質問 12（2）「あなたが利用したトイレが、任意のチップ制（料金は任意で、支払うとしても 200 円以下とします）であったとします。このとき、あなたはどうしますか。」に対しての回答である。

若年層は、「支払う」「どちらかというと支払う」を合わせると 76% となった。この支払い意思の傾向は、年代があがるにつれて高くなり、「どちらかというと支払わない」「支払わない」という割合が減っている。

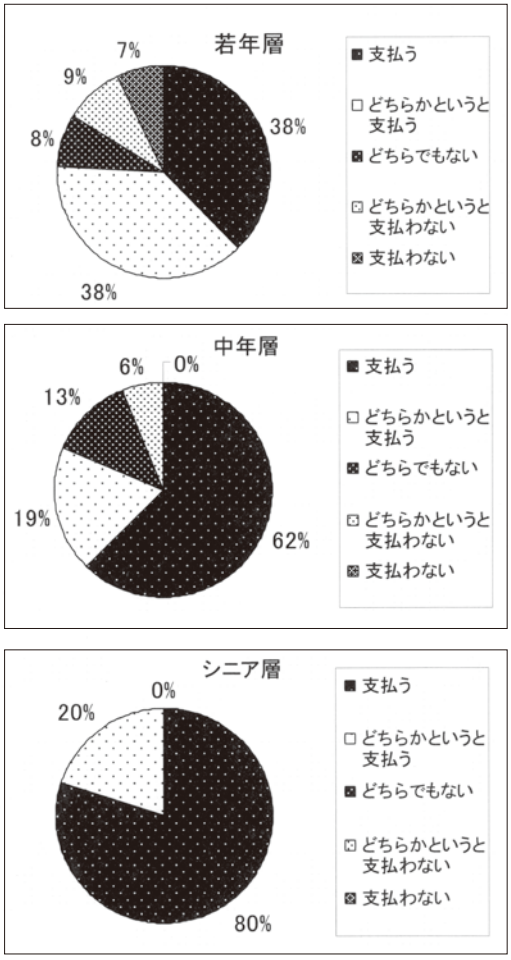


図 12　質問 12（2）に対する回答

また、トイレのし尿問題に対する意識について質問 12(3) でより詳細な意識の把握を試みた。図 13 は、「近年、屋久島登山客増加にともなう、トイレの利用量もふくらみ、し尿の処理が問題になっています（自然分解の限界など）。このことについて、A ～ I 各項目のあてはまる数字ひとつに○をつけてください。」に対する回答である。

若年層で「かなりあてはまる」と「まあまああてはまる」を合わせた回答でもっとも高い割合となったのは、「トイレの利用料を引き上げそのお金でし尿の搬出を行うべきだ」という項目で 60% を超えた。ついで「国や自治体の税金でし尿の搬出を行うべきだ」「携帯トイレの携行を義務づけるべきだ」が同約 40% となった。「各自でし尿を持ち帰るべきだ」については、「あまりあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」が約半数に達し、否定的な見方をしていることがわかる。

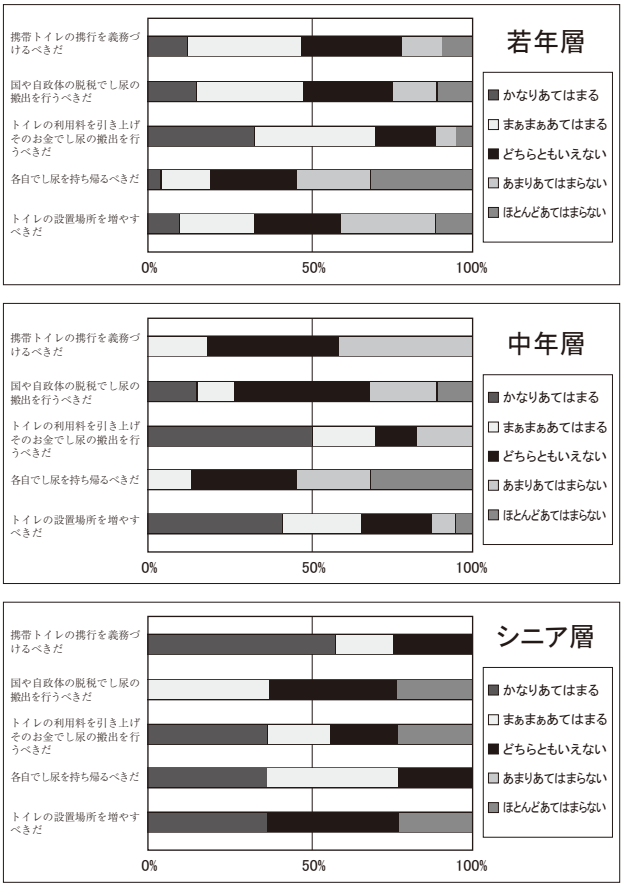


図 13　質問 12（2）に対する回答

中年層でも、「トイレの利用料を引き上げそのお金でし尿の搬出を行うべきだ」という項目について「かなりあてはまる」「まあまああてはまる」が約 80% ともっとも高くなった。ついで「トイレの設置場所を増やすべきだ」が同約 60% となった。「各自でし尿を持ち帰るべきだ」については、この世代がもっとも否定的な割合が高くなった。

シニア層は、「携帯トイレの携行を義務づけるべきだ」と「各自でし尿を持ち帰るべきだ」について、「かなりあてはまる」「まあまああてはまる」が約 80% を占めた。ついで、「トイレの利用料を引き上げそのお金でし尿の搬出を行うべきだ」が同約 60% となった。

世代によってし尿処理についての意識に違いがあるが、若年層と中年層は「トイレの利用料を引き上げそのお金でし尿の搬出を行うべきだ」について、シニア層は「携帯トイレの携行を義務づけるべきだ」についてもっとも肯定的である。若年層と中年層で否定的であった「携帯トイレの携行を義務づけるべきだ」については、シニア層は一転して肯定的にとらえており、認識の差が認められる。

これは若年層と中年層は、利用料の設定や引き上げによる財源をもとにした処理が可能ではないかと考えられること、シニア層は、個人のマナーに処理の改善を希求していくといった意識の差異が認められる。

3.2.4. 山小屋への意識

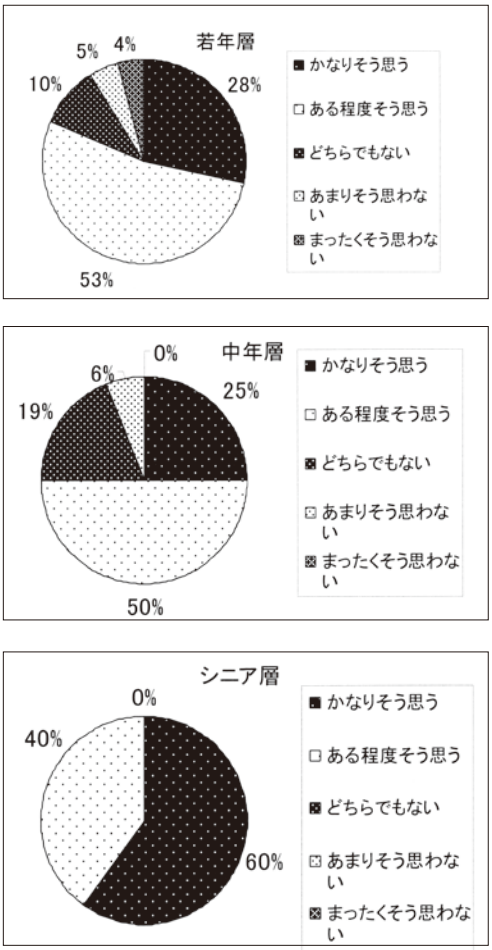


図 14 質問 13（1）に対する回答

図 14 は、質問 13（1）「山小屋は必要だと思いますか。」に対しての回答である。

この質問に対して、若年層は「かなりそう思う」「ある程度そう思う」が81%、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」は 9% にとどまった。中年層は、「かなりそう思う」「ある程度そう思う」が 75%、「あまりそう思わない」が 6% となった。シニア層は、「かなりそう思う」「ある程度そう思う」で 100% を占め、否定的な意識はみられなかった。

さらに、山小屋の存在について質問 13（1）の回答理由について自由筆記を求めたものが、質問 13（2）である[1)]。理由として記述されたものについては、KJ 法を用いて大きく 7 つに分類することができた。自由筆記のうち、代表的な回答例を抽出したものとあわせて、以下に示す。

①「環境」
・キャンプ等で人為的に壊される場所をできるだけ減らすべきだから。
・環境に配慮された山小屋を建てると良いと思うから。

②「休憩」
・年配の方々には休憩する場所が必要であるから。
・テントを担げない高齢者などに必要であるから。
・休憩できると共にゴミ等の処理を行えると考えるから。

③「娯楽」
・登山の楽しみの一つであるから。
・山を楽しむ選択肢が広がるから。
・山小屋で泊まるのも登山の醍醐味だから。

④「安全」
・登山初心者にとって山小屋がある方が安心して参加できるから。
・登山者の異常時・緊急時（怪我や病気、避難場所）に必要だから。
・遭難した場合に必要だから。

⑤「便利」
・テントを運ぶ手間が省けるから。
・足の悪い人や子供連れの人には便利だから。
・水分補給・トイレ利用時に便利だから。

⑥ 天候
・冬場宿泊するのに必要だから。
・雨宿り (天候悪化時) に必要だから。

⑦ 不要
・全てポイントが日帰りで可能な範囲にあるため。
・人工的な施設をなるべくなくすべきだから。

この結果、山小屋に対するイメージは、「環境」「休憩」「娯楽」「安全」「便利」「天候」「不要」に分類できたが、回答例をみてもわかるように山小屋は安心して自然に触れるために多面的な機能をもつ施設として多くの観光客からみなされていることが読み取れる。また、否定的な意見は、そもそも山小屋の恩恵に預かったことがない行程である場合や、自然環境への配慮を理由に挙げるものであった。エコツーリズムの対象として自然環境をとらえる場合、まったく人間が手をつけない状態を扱うことはむしろ稀である。安全確保に最低限必要とされる山小屋の整備は、エコツーリズムの対象としての自然環境の場合は欠かすことのできない側面があり、その上で整備の具体的内容について多様な主体が議論していくことが求められよう。

3.2.5. 観光地としての選好性への意識

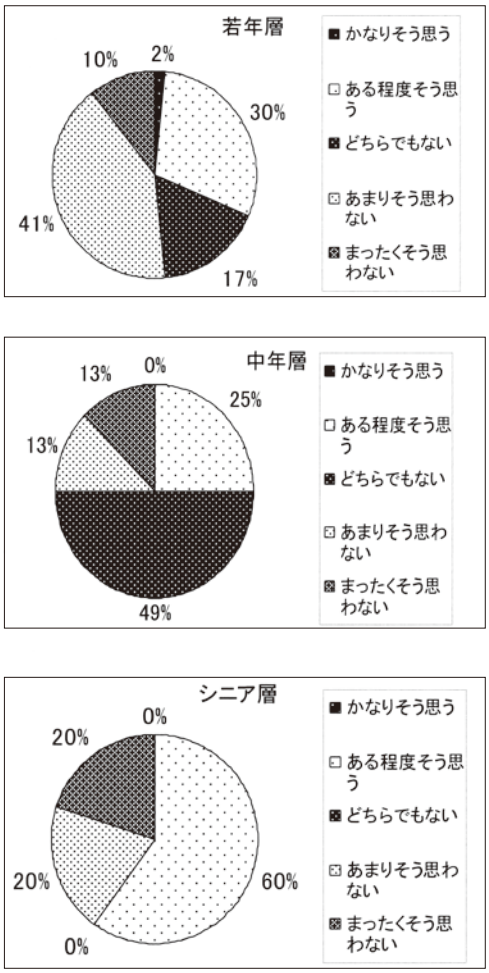


図 15 質問 14 に対する回答

図 15 は、質問 14「今後、仮に屋久島の自然破壊が進み、縄文杉や西部林道地域等の環境が劣化したとします。そうした場合、屋久島を観光地に選びますか。」に対する回答である。

この質問に対して、若年層は、「かなりそう思う」「ある程度そう思う」が 32%、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」が 51% と否定的意見が過半数を超えた。中年層では、「ある程度そう思う」が 25%、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」が 26% に対して、「どちらでもない」が 49% と過半数に迫る結果となった。シニア層では、「ある程度そう思う」が 60%、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」が 40% となった。

このことは、年代が若くなるほど自然環境の存在が屋久島へと足を向けさせる理由となっていることを顕著に表している。年代が高くなるごとに、判断しかねる、あるいはそれでも足を向けるだろうという、自然環境にとどまらない魅力を見出す指向のあることが示唆される。

3.2.6. 屋久島で展開されるエコツーリズムへの意識

質問 15 として、屋久島におけるエコツーリズムに対して自由意見を求めた [1)]。それらを、KJ 法により分類を試みたところ、「ガイド」「反商業主義」「トイレ」「エコツーリズム推進」「エコツーリズム否定」「個々の環境意識」「登山道」「エコツーリズムを知らない」8 つの種類と、「その他の意見」に整理できた。多様な意見が記されており一概に述べることは難しいが、屋久島で展開されているエコツーリズムに対しては、条件つき賛成とも言うべき立場のものが多かった。「エコツーリズム否定」に分類された意見にも、屋久島での観光そのものを否定するのではなく、エコツーリズムが本来もつ理念が具現化しないことには、結果として観光客や地域住民にとってマイナスの影響が大きくなってしまう点を危惧する論調のものでほとんどを占めた。

4. 考 察

本稿は、1. で述べたように、世界自然遺産を目的として訪れる観光客は自然環境保全への興味や理解があるのではないかという仮説にたって、その意識を把握するべく進めてきた。世界自然遺産登録によるメリット、デメリットはそれぞれあるが、結果として生じる観光客の増加を好機ととらえ、自然環境に対する関心喚起につながると考えられる。

このことを踏まえ、前章で示したアンケート結果について、その要因について考察を加えていく。

4.1. 世界自然遺産登録への意識に関して

4.1.1. 世界遺産制度の目的

質問 5 で扱ったように、世界遺産制度は、自然や文化の保護を目的としており、観光振興は副次的な現象である。観光振興と結びつけた議論は、世界遺産登録をめざす段階で喧伝されることが多く、制度本来の意味が曲解されるおそれもある。とりわけ日本では、集客力のある観光資源として世界遺産は注目の的になっており、またそれらを扱う情報も豊富である。すでに「世界遺産」という言葉そのものは一般に浸透したといえよう。日本でも次第に世界遺産の登録数が増えていくと、世界遺産登録地で観光客の過度ともいえる増加が起き、自然環境や生活環境に悪化を招く事態を問題視した報道や書籍の刊行が相次いだ。熊野古道や白川郷の飛躍的な知名度の向上は、多くの観光客が訪れる人気スポットとなり、保護の役割を再び問い直すといった動きもみられるようになっている[2)]。このような背景から、世界自然遺産が本来持つ制度的な役割について知っている観光客は近年増えつつあるのではないかとの見通しを立てていた。

それに対して、認識割合は比較的高いとの結果であり、このことは世界遺産制度の本来の役割について浸透してきていると評価できよう。

しかし、同時に「知らない」と答える人も若年層・中年層で約 40% に上る点にも注目する必要がある。敷田編（2008）でも指摘されているように、「屋久島など、世界自然遺産に登録された観光地では、「世界遺産効果」で登録後に観光客が増加」しているが、それは本義的な「エコツーリストが増えたのではなく、知名度が上がったことで一般の観光客が増えた」ことを認識しておくべきである、言い換えれば、知名度の高さからその存在に興味を持ち、世界自然遺産が本来もつ自然保護の役割などは二の次にとらえてしまうような観光客も訪れやすくなるという背景を知っておかなければならない[3)]。

4.1.2. 世界自然遺産と観光客増加への意識

質問 6 の結果は、前項でもふれたように、世界遺産に登録されたことが観光客の増加につながるという認識をほぼすべての観光客がもっていることを明確に示している。

実際に、屋久島では 1993 年の世界自然遺産登録以降、観光客数は増加傾向をたどった。観光客数は 2010 年度が約 33 万人で、93 年度から 12 万人以上増えている。観光の目玉の 1 つは「縄文杉」で、一目見ようと年間で約 9 万人が訪れている。質問 15 の自由筆記中にも、「縄文杉や白谷にあまり人が多く驚いた。」などという声が複数みられた[4)]。

また、質問 7 の結果は、屋久島を訪れる観光客の増加による経済効果が表れていることが背景にあるだろう。屋久島町民の平均所得も世界遺産登録後は上昇し、鹿児島県全体の平均所得との格差は縮まりつつある（坂井，2008）。屋久島を訪れる観光客のなかには、エコツアーガイドを依頼する者も少なくない。萩野（2011）によれば、1 泊 2 日コースは 1 人 35,000 円が標準的な価格となっている。本コースに参加するグループの構成人数は 3.1 人であり、概算でも 1 コースで 108,500 円という決して安くはない対価を支払っている。このようなことから、地域にプラスと考える人が多いのも納得できる。

ただし、ここではあくまでも経済波及効果の側面に限る点に注意する必要がある。世界遺産の本来持つ保護の役割について考えてみれば、いかにその劣化を防ぎながら適正利用を模索していくかが重要となる。

4.2. 入山規制への意識に関して

質問 10、11 で扱ったように、縄文杉などを訪れる観光客の増加で、自然環境への過重な負荷が懸念されていることが報道や書籍でも登場するようになっている状況や、世界遺産として国内でもっとも知名度が高い点から[5)]、屋久島への観光客は主として観光資源として自然環境に触れることを目的にするため自然環境への負荷を軽減するための入山規制に賛同的立場をとる割合が高いと推察される。

それに対して、「入山規制が必要である」という入山規制に肯定的な人の割合は高いが、1 日 400 人の制限や手数料などの条件が加わると、入山規制に納得できないという否定的な人の割合が高くなるという結果が得られた。

人数を制限されることにより、入山することの稀少性がより高くなり、入山ツアーの料金が高騰する事態も予測される。その結果、旅行業者をはじめ、観光業にさまざまな形でかかわる住民の多い屋久島の経済にも影響がでることも想定される。実際に、2011 年に新聞紙面をにぎわせた縄文杉などへの立ち入り制限条例案は、6 月に全会一致で否決後、さらに 9 月町議会への提出も見送られた。2012 年 1 月、条例案にかわり屋久島への入島料の徴収に向けた検討会を 4 月に役場内に発足させることを発表した[6)]。

この点については、総論賛成、各論反対のような観光客の微妙な心情が読み取れよう。自然環境に魅力を感じ屋久島まで足を運ぶ観光客が、縄文杉などに立ち入れるか確実とは言えなくなることへの不満を覚えつつも、それでも自然環境の保全については何らかの対策は必要と感じていることは、今後の入山料や入島料の料金や徴収方法をどのようにするかといった具体的な議論のなかに反映していくべきである。

4.3. トイレのし尿処理問題への意識に関して

質問 12 の結果は、縄文杉などへの登山ルートで使用するトイレのあり方について、自然環境の恩恵を受ける観光客に受益者負担の視点からある程度の負担を求めることは、観光客にとっても納得できるのではないかと考えられる。

それに対して、どの世代ともトイレの有料化に肯定的な割合が多数を占め、さらに年代があがるほどトイレの有料化に肯定的な割合も高くなった。アンケートの自由記述（質問 15）においても、「観光、登山目的であれば、し尿の処理や自然保護のための費用がかかるのは当然だと思う。」「登山客に対してトイレ代をとるべき。」といった指摘があった。

し尿処理に関する質問に対して、総じて若年層と中年層は、利用料の引き上げによる搬出や、国・自治体の税金による搬出など、資金の確保と他者による処理に期待する割合が高く、シニア層は、携帯トイレの携行義務といった個人レベルでの対応に肯定的であることが明らかになった。

利用料の引き上げは、利用者という受益者負担の原則に適ったものであるし、場合によっては入山料の徴収といった形で資金が確保できれば、し尿処理が現在よりは安定的になされる可能性がある。一方で、屋久島の場合、島嶼という空間的な完結性が高いため、島外への搬出は現実的な処理方法とはいえない。加えて、地域住民の高齢化の進行は、体力を必要とする登山道を往復しての搬出作業の担い手が減少していくことを意味する。現在のように、無償ボランティアに依存する方法では、いずれ屋久島のトイレ事情は深刻な環境問題になるおそれがある。

島嶼という地理的特性を考えた場合、理想は携帯トイレ等での個人単位の責任ある処理の浸透であるが、当面はこの普及啓発と並行して、上で述べたような資金を作り出すことで担い手の確保を求める方法が現実的と言えるのではないだろうか。

4.4. 山小屋の存在への意識に関して

質問 13 について、山小屋が本来持つ安全確保や休憩といった役割と、過剰な整備がさらに来訪者を増加させるという循環を招く側面があり、山小屋の設置には綿密な計画が求められる。

これに対して、年代が高くなるにつれて必要と考える割合が高くなる傾向がみられた。すなわち、観光客にとって山小屋は体力を消耗したり荒天に遭ったりした場合に、屋久島に限らず登山において、ある種の安心感を与える施設との認識があると考えられる。また、年代に限らず、自然環境のなかでは思わぬ緊急事態に遭遇しないとは限らないため、登山道には一定の間隔で山小屋が立地していることが、観光客にとって安全が担保されるという心理的な効果は大きいと言える。

4.5. 観光地としての選好性への意識に関して

質問 14 については、観光客にとって屋久島を訪れる最大の理由は、世界自然遺産に登録されている自然環境に触れる点にあることから、その劣化は観光地としての魅力を一気に喪失することにつながり、観光客の減少が生じるものと考えられる。

すなわち、観光地に選ばないと回答した人がほとんどを占めることが分かった。

それぞれの地域にしなかい固有性や非移転性といった観光資源のうち、とくに自然環境資源はひとたび注目されるようになると、その人気は持続する傾

向が強いと言われる[7]。また、環境保全を役割の1つに掲げるエコツーリズムの場合、「「手付かず」の原生自然が魅力的な観光資源」としてとらえられ、そこを訪れる観光客は、「日常生活では接することのできない自然環境を体験したい」がために、「このような自然環境に高い関心を寄せ」るようになるのである（敷田編著，2008）。

このことは、屋久島でも同様である。自然環境が見どころとして特化した地域の場合、その状態が損なわれれば観光客の来訪の動機が失われるのは当然のことである。自然環境は、人文資源（人工物）とは異なる高い「不可逆性」を有している点を、まずは観光客が認識できるような機会提供の工夫が不可欠である。

5. おわりに

本稿は、世界自然遺産登録地である屋久島を訪れる観光客を対象にアンケート調査を実施し、その結果をもとに観光客の環境保全意識の特性を把握することを目的に論を進めてきた。

その結果、明らかになった点は大きく 3 つに整理できる。

(1) 世界自然遺産制度について、その目的の認識度は高く、世界自然遺産に対する興味も高いなど、プラスのイメージを持っている観光客が多い。
(2) トイレ問題など、屋久島で起こっている環境負荷に係る問題の解決について、その必要性への理解は高いものがあるが、個別の施策に対しては相対的に否定要素の割合が高まる。
(3) エコツーリズムを掲げる観光地の場合、自然環境に魅力を感じて足を運ぶケースがほとんどであることから、仮に現在の屋久島の自然環境が損なわれてしまうと、屋久島を観光対象として選ぶ可能性は低くなる傾向がある。

筆者は、いわゆる世界遺産ブームにより、ある地域の注目度が上がり、結果として観光客が増えることは、ただちに自然環境や生活環境に悪影響をもたらすと考えるのは拙速に過ぎると考えている。つまり、そのような人間の行動を、単に「環境破壊」につながるととらえるのではなく、「自然に興味を向ける人」が増える好機になると肯定的に評価したいと考える。

今回のアンケート調査の結果からも明らかなように、世界自然遺産を訪れる観光客が増えることで、世界自然遺産が本来は保全を目的としている点を理解していたり、世界自然遺産で起こる諸問題への対策の必要性を理解したりしている裾野は広がる。その前提として、当然ながら環境教育プログラムの必修化など、観光客により実際の自然環境の状態に関心を向けてもらう努力が重要になってくる。

そもそも人間が自然環境の中に入ること自体が環境破壊だと極論するケースもあるが、人間は自然環境とのかかわりなくして生活できず、自然環境の多くも人間環境との絶妙なバランスのもとに存在していることも少なくない。とくに、屋久島の場合、民俗学的に自然との共生に独特の知恵が根づいていたことが知られている。その歩みを踏まえて、自然環境に偏りがちな観光客の来訪先を、それらを連綿と保全し続けてきた地域住民との交流を通した相互理解の場にも拡大､多様化が図られることを早急に望む。

筆者がこのように感じるのは、自然環境の不可逆性を鑑みたとき、自然環境資源と観光の両立を指向し環境負荷の軽減を実効力のあるものにしていくには、技術的な直接的対処も重要であるが、それと同時に、1人でも多くの観光客が自然環境に興味関心を抱き、その裾野が拡大していくという施策の充実が、問題の解決に持続的な効果をもたらすと考えている｡たとえば、世界自然遺産の意義として、保護や保全はもちろんのことであるが、貴重な自然環境そのものを多くの来訪者に知ってもらうという大切な使命がある。

屋久島で起きている入山規制の条例案の議論の収束と、その後に表面化した入島料の設定に向けた議論のスタートという現状は、実際に屋久島の自然環境保全のレベルが今のままでは立ちいかなくなることを示している。この実態を、観光客の環境保全意識に沿った環境教育プログラム等を策定できれば、入山規制の賛否や屎尿処理のあり方についても具体的な合意形成への前進が期待できるだろう。

最後に、本研究の課題についていくつか述べておきたい。

(1) アンケート調査の被対象者の年齢が若年層に偏ったため､本稿の目的とする環境保全意識の把握は、若年層寄りの結果となっている点である。アン

ケートの実施時期が学生の夏季休業期間とも重なったなどの理由が挙げられるが、今後、サンプルとなる対象者の選定の手法を精緻化していく必要がある。

(2) 本稿は、アンケートの調査結果を3つの年代別に速報的に報告することに主眼を置いた内容となっている。今後、クロス集計等、必要に応じて継続したデータ分析をおこなっていく必要がある。

付記

本研究は、科学研究費・基盤研究（B）「正負の生態系サービス経済評価のための環境経済・倫理・法政策・生態学の融合研究」（研究代表者：吉田謙太郎）の成果の一部である。

注

1) 自由記述の詳細については、仁木（2012）に収録している。

2) 世界遺産登録を審査するユネスコ事務局長を務めた松浦晃一郎氏は、「世界遺産を見ることは、…まさに、ユネスコが謳う「国民間の相互理解を深めることに貢献する」わけで、大いに評価したいと思う。しかし注意しなければならないのは、増大する観光客を念頭に置いて、いかに世界遺産の顕著な普遍的な価値を守っていくか、という点である。…まず周到な保護管理体制を作る必要がある。他方、観光客にも顕著な普遍的な価値を次世代に伝えるという義務を認識し、世界遺産をじっくり鑑賞する姿勢」が求められると警鐘を鳴らしている（松浦，2008）。

3) サーベイリサーチセンターが 2011 年 11 月に実施した「世界遺産に関する生活者の意識調査」（全国の 10 ～ 60 代男女 965 人を対象）に実施した調査によれば、世界遺産に「とても興味、関心がある」「やや興味、関心がある」と答えた割合は 68%、国内に 16 か所ある世界遺産のうち、登録されていることを知る割合がもっとも高かったのが屋久島で 70.3%、訪れたいと思う世界遺産でも屋久島が 56.0%で最高となっている。それだけに屋久島は、エコツーリズムや世界自然遺産と観光の持続的な展開を図る試金石としての役割を有している。

4) たとえば、2011 年 8 月 22 日付の西日本新聞記事「縄文杉の見学制限条例案否決 観光客減に反発強く」において、「着いたと思ったら、縄文杉の展望デッキも混雑し、ガイドが「写真を撮ったら移動して くださーい」と誘導する。別のガイド…が言った。「秘境のイメージでここに来ると、想定外でしょうね」」と、混雑する縄文杉周辺のようすを報告している。

5) 前掲 3）による。

6) 2012 年 1 月 27 日付の南日本新聞記事による。

7) 溝尾（2009）は、「自然資源のほうが、人文資源に比べると、多少面的な広がりがあるので、単独資源で観光地」と位置づけられると述べている。この背景には、人間にとって自然環境は五感に訴える要素がつよく、人文資源に比べて受容しやすい性質があることが指摘できる。

参考文献

坂井宏光（2008）：日本の世界遺産における環境保全型観光産業の発展と課題 - 屋久島の世界自然遺産を中心として -. 教養研究，15（1），pp.63-79.

敷田麻実編著（2008）：『地域からのエコツーリズム―観光･交流による持続可能な地域づくり』. 学芸出版社.

鈴木晃志郎（2010）：ポリティクスとしての世界遺産. 観光科学研究，3，pp.57-69.

仁木可奈子（2012）：世界遺産の意義と観光客の環境保全意識 - 屋久島を訪れる観光客を中心に -. 長崎大学環境科学部卒業論文.

萩野誠（2011）：屋久島縄文杉ルートの現状と観光としてのエコツアー. 経済学論集，76，pp.41-56.

深見聡（2011）：環境保全と観光振興のジレンマ - 屋久島を事例として -. 地域総合研究, 39(1･2 合併号), pp.43-52.

深見聡・坂田裕輔・柴崎茂光（2003）：屋久島における滞在型エコツーリズム - 地域住民との連携を主軸とした確立可能性 -. 島嶼研究，4，pp.41-55.

松浦晃一郎（2008）：『世界遺産 ユネスコ事務局長は訴える』. 講談社.

溝尾良隆（2009）：「観光資源と観光地の定義」『観光学の基礎』. 原書房.

資　料

エコツーリズムに関する意識調査

調査ご協力のお願い

私は長崎大学環境科学部自然・文化ツーリズム研究室 4 年のメンバーです。

このたび、「屋久島を訪れる観光客にみるエコツーリズムへの意識」という題目でフィールドワークに取り組むことになりました。

この調査は、世界自然遺産登録地(縄文杉・西部林道地域など)をメインとしたエコツーリズムについて、皆様のお考えを学術的に把握することを目的としています。

どの質問にも正しい回答はありませんので、気軽に回答して下さい。

なお、提供された個人情報は厳正な管理のもとに置き、目的外に使用することはありません。ご協力下さいますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

[アンケートに出てくる用語]

＊エコツーリズムとは
自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境の保全に配慮した観光のことをいいます。

【お問い合わせ先】
・調査者：菊地由貴子・仁木可奈子・山口明日香
・指導教員：深見　聡
（長崎大学環境科学部・准教授）
・連絡先：095-819-2720(研究室)
fukami@nagasaki-u.ac.jp(深見)

1. あなたの今回の旅行についておたずねします。

1. 今回の旅行の日程(屋久島の滞在期間の日数)はどのくらいですか。該当するもの１つに○を付けてください。
ア.1 泊 2 日　**イ**.2 泊 3 日　**ウ**.3 泊 4 日　**エ**.4 泊 5 日　**オ**.5 泊以上

2. 今回の旅行の目的地(屋久島)を選ぶにあたり、参考にした手段について、該当する**すべてに**○を付けてください。
ア.雑誌　**イ**.新聞　**ウ**.インターネット　**エ**.テレビ　**オ**.ラジオ
カ.バス・電車等の車体・車内広告　**キ**.旅行代理店　**ク**.友人・知人の情報
ケ.その他(　　)

3. 通常、あなたが旅行する場合に目的とされることについて、Ａ～Ｉ各項目の当てはまる数字１つに○を付けてください。

	かなり あてはまる	まあまあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	ほとんど あてはまらない
Ａ.周遊観光	5	4	3	2	1
Ｂ.ゆったり過ごす	5	4	3	2	1
Ｃ.都市観光	5	4	3	2	1
Ｄ.温泉	5	4	3	2	1
Ｅ.祭などイベント	5	4	3	2	1
Ｆ.グルメ	5	4	3	2	1
Ｇ.スポーツ	5	4	3	2	1
Ｈ.自然を楽しむ	5	4	3	2	1
Ｉ.同行者と賑やかに過ごす	5	4	3	2	1

2. 次に、「エコツーリズム」のことについておたずねします。

＊エコツーリズムとは
自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境の保全に配慮した観光のことをいいます。

1. あなたは、「エコツーリズム」ということばを聞いたことがありますか。
ア.よく聞く
イ.ときどき聞く
ウ.聞いたことがある気がする
エ.聞いたことがない

SQ.「アまたはイ」と回答した方に伺います。
それはどこで聞きましたか。
a～g のうちあてはまるものすべてに○印を付けてください。
a.観光ガイドブックなどの書籍
b.パンフレット、リーフリット類
c.道路などに設置されている看板・のぼり旗
d.インターネット
e.新聞・テレビなど報道
f.パックツアーなど旅行商品
g.その他(　　)

2. 屋久島は、世界自然遺産に登録されていることを知っていますか。
ア.知っている　**イ**.知らない

3.「エコツーリズム」について、興味がありますか。
ア.かなりそう思う　**イ**.ある程度そう思う　**ウ**.どちらでもない
エ.あまりそう思わない　**オ**.まったくそう思わない

4.「エコツーリズム」は、自然環境の保全につながると思いますか。
ア.かなりそう思う　**イ**.ある程度そう思う　**ウ**.どちらでもない
エ.あまりそう思わない　**オ**.まったくそう思わない

5.「世界遺産」制度は、自然や文化の保護を目的としたもので、観光振興を目的には掲げていません。このことを知っていましたか。
ア.知っている　**イ**.知らない

6. いまあなたが訪れている屋久島は、「世界自然遺産」に登録されています。そのことは、今後、屋久島の旅行客が増えるのに役立つと思いますか。
ア.かなりそう思う　**イ**.ある程度そう思う　**ウ**.どちらでもない
エ.あまりそう思わない　**オ**.まったくそう思わない

7. 屋久島が「世界自然遺産」に登録されたことは、地域にとってプラスになったと思いますか。
ア.かなりそう思う　**イ**.ある程度そう思う　**ウ**.どちらでもない
エ.あまりそう思わない　**オ**.まったくそう思わない

8. あなたは「エコツーリズム」についてどのようなイメージを持っていますか。
Ａ～Ｉ各項目の当てはまる数字１つに○を付けてください。

	かなり あてはまる	まあまあ あてはまる	どちらとも あてはまらない	あまりあて はまらない	ほとんど あてはまらない
Ａ.楽しい	5	4	3	2	1
Ｂ.勉強になる	5	4	3	2	1
Ｃ.心が休まる	5	4	3	2	1
Ｄ.感動する	5	4	3	2	1
Ｅ.分かりやすい	5	4	3	2	1
Ｆ.環境にやさしい	5	4	3	2	1
Ｇ.何度も訪れたい	5	4	3	2	1
Ｈ.将来にわたり地域に根づく仕組みである	5	4	3	2	1
Ｉ.面倒・厄介な仕組みである	5	4	3	2	1

9.「エコツーリズム」の取り組みのなかに、ツアーガイド(案内人)の存在があります。あなたは、いま訪れている屋久島地域のみどころや登山に必要なアドバイスについて、ツアーガイドによる案内で出かけてみたいと思いますか。
ア.かなりそう思う　**イ**.ある程度そう思う　**ウ**.どちらでもない
エ.あまりそう思わない　**オ**.まったくそう思わない

10. 登山客が増えることで、自然環境への負荷が指摘されつつあります。それに対して、入山規制を設けるといった議論がなされている地域もあります。
あなたは、入山規制がなされるべきだと思いますか。
ア.かなりそう思う　**イ**.ある程度そう思う　**ウ**.どちらでもない
エ.あまりそう思わない　**オ**.まったくそう思わない

11. 屋久島町役場は、自然環境への負荷を考慮した条例案(例えば、縄文杉への立ち入りを 1 日 400 人程度に制限し、1 人 400 円の手数料を支払うといった内容)を、2011 年 6 月に町議会に提出しましたが、議会は全会一致で**立ち入り制限を設けることを否決**しました。あなたは、このことについて納得できますか。
ア.かなり納得できる　**イ**.ある程度納得できる　**ウ**.どちらでもない
エ.あまり納得できない　**オ**.まったく納得できない

12. 屋久島の登山時におけるトイレの利用についてお聞きします。

(1) あなたが利用したトイレが、有料(高くても 200 円)であったとします。このことについて、あなたはどう思いますか。
ア. 大いに賛同　**イ**. どちらかというと賛同　**ウ**. どちらでもない
エ. どちらかというと賛同できない　**オ**. まったく賛同できない

(2) あなたが利用したトイレが、任意のチップ制(料金は任意で、支払うとしても 200 円以下とします)であったとします。このとき、あなたはどうしますか。
ア. 支払う　**イ**. どちらかというと支払う　**ウ**. どちらでもない
エ. どちらかというと支払わない　**オ**. 支払わない

(3) 近年、屋久島の登山客増加にともなう、トイレの利用量もふくらみ、し尿の処理が問題になっています(自然分解の限界など)。
このことについて、A～I 各項目の当てはまる数字 1 つに○を付けてください。

	かなりあてはまる	まあまああてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない
A. トイレの設置場所を増やすべきだ。	5	4	3	2	1
B. 各自でし尿を持ち帰るべきだ。	5	4	3	2	1
C. トイレの利用料を引き上げそのお金でし尿の搬出を行うべきだ。	5	4	3	2	1
D. 国や自治体の税金でし尿の搬出を行うべきだ。	5	4	3	2	1
E. 携帯トイレの携行を義務づけるべきだ。	5	4	3	2	1

13. (1) 山小屋は必要だと思いますか。
ア. かなりそう思う　**イ**. ある程度そう思う　**ウ**. どちらでもない
エ. あまりそう思わない　**オ**. まったくそう思わない

(2) (1)でその記号を選んだ理由を教えてください。

14. 今後、仮に屋久島の自然破壊が進み、縄文杉や西部林道地域等の環境が劣化したとします。そうした場合、屋久島を観光地に選びますか。
ア. かなりそう思う　**イ**. ある程度そう思う　**ウ**. どちらでもない
エ. あまりそう思わない　**オ**. まったくそう思わない

15. 最後に、屋久島におけるエコツーリズムについてご意見がありましたら、自由にご記入ください。

※各項目の当てはまるところに○印をつけてください※

■あなたの年齢　満（　　）歳

■あなたの性別　（　男　・　女　）

■あなたの職業　**ア**. 会社員　**イ**. 公務員　**ウ**. 自営業　**エ**. パート
オ. 専業主婦・主夫　**カ**. 無職
キ. その他（具体的にお書きください:　　）

■同行者数(回答者を含む)
ア. １人　**イ**. ２人　**ウ**. ３～４人　**エ**. ５～６人　**オ**. ７人以上

■出　発　地　**ア**. 北海道　**イ**. 東北　**ウ**. 関東　**エ**. 中部
オ. 近畿　**カ**. 中国　**キ**. 四国　**ク**. 九州・沖縄　**ケ**. 国外

以上で質問は終了です。ご協力いただき、誠にありがとうございました。
ご記入漏れがないか、もう一度お確かめください。